

林業経済研究所創立 70 周年記念企画 リレーインタビュー⑥

私の研究史〈依光 良三〉

聞き手：松本美香*

日 時：2017年3月2日

場 所：高知大学物部キャンパス

1. 経歴とこれまでの研究の変遷

◇生い立ち

1942（昭和17）年に高知県安芸郡井ノ口村（現在の高知県安芸市）で生まれた。農村だが、山はすぐ近くにあり、安芸川もすぐ近くに流れていた。子どもの頃、元気な時には、夏は川ガキ、秋から冬は山ガキとして山と川の恵みを享受していた。この自然の中で癒されながら育った原体験が、後々の生き様に大きく影響し、今も川と山・森が最大の関心事であること（趣味：アユ釣り、奥物部の自然林探訪）、（環境問題：川の荒廃と源流の山・森のシカ食害）につながっている。

実家は割と大きな和紙工場を経営していて、経済的には恵まれていたのだが、小学生時代は、最もつらい時期だった。低学年時に母、祖父、祖母が相次いで亡くなり、土葬の様子を目の当たりにして、奈落の底に落ちる夢をたびたび見た。自身も結核を患って、3年生と6年生の時は、それぞれ1学期しか通学できず、入院か自宅療養生活。それでも、小学校は6年で卒業させてくれた。そんなつらさを癒してくれたのが、身近にあった川と山・森であった。

小学生時代は勉強どころではなかったが、どちらかというと、勉強は生来嫌いなほう。いまだに嫌い。でも、調べるのは好きで、一旦、興味を持ったものには徹底的に入り込む。こういう性格が現場型の研究者としての道を歩むことにさせたのだと思う。

◇研究者としてのスタート：(22歳)

大学に進学する時に考えた分野は、子どもの頃から親しんだ山か川。川について鮎の研究もしたかったが、山関係にした。そして、東京農工大学農学部林学科に入学し、その中でも比較的楽そうな林政を専攻、大学院は京都大学農学研究科（農林経済学専攻）へ進んだ。

大学院では、岸根卓郎先生に師事したが、林政学の看板をかかげていたものの実体は統計学、計量経済学であった。研究室では、農経の先輩が農業の技術進歩率の計測に関する研究をされていたので、それを林業でやってみようと考えた。当時は丁度、伐出生産の機械化が進み出した時期で、タイムリーなテーマかなと思った。

調査対象は国有林。まず、機械が入って以降の東京営林局の事業統計書を調べた。国有林は、1954年の洞爺丸台風被害があってから急速に機械化を進めていた。立地条件の違い、奥地林と里山的な森林の二範疇に分けて分析をすることにした。管内には、静岡の南アルプスから北は八溝山地の茨城県側も含まれ、奥地林と里山林の両方があった。

*高知大学教育研究部自然科学系農学部

主な経歴

年	経歴
1942	高知県安芸郡井ノ口村（現在の高知県安芸市）に生まれる
1960	東京農工大学農学部林学科入学
1964	東京農工大学農学部卒業 京都大学大学院農学研究科農林経済学専攻修士課程入学
1967	京都大学大学院農学研究科農林経済学専攻修士課程修了 (財)林業経営研究所（後に、林政総合調査研究所）研究員
1978	高知大学講師 農学部
1979	高知大学助教授 農学部附属演習林
1985	博士号取得（京都大学）
1995	高知大学教授 農学部附属演習林
1998	高知大学農学部附属演習林長（～2000年3月31日）
2005	高知大学名誉教授
2007	三嶺の森をまもるみんなの会代表

比較調査の結果、機械化は圧倒的に奥地での生産性・技術進歩に寄与し、奥地林開発を進める技術的基盤となっていた。それについて初めて投稿したのが1967年の『林業経済』20(9)に掲載された「素材生産事業における機械化の影響—東京営林局を対象として—」である。

◇環境問題への気づき：(20歳代後半)

1967年に林業経営研究所に入所した。林業経営研究所は途中で改組になって林政総研となったが、当時は林野庁の委託調査だけを行っていた。林業経営研究所には優秀な研究者が揃っていて、小川誠、奥地正、阿部正昭、安藤嘉友、村嶋由直、赤井英夫さん等、そうそうたるメンバーがおられた。私は、初めて学会のシンポジウムに出た時も、ろくに質問に答えられないほどディベート力に欠けていた。研究所でも研究会・議論が活発で、マルクス経済学が主流だったこともあり、ついていけずにコンプレックスに陥っていた。その分、調査と書く方を頑張ることにした。

研究については、就任当初はテーマを自由に決めてよかったので、修論でやった場所について実際の現場を見に行った。まず、大井川源流に立地する南アルプスの奥地林開発地の基地である千頭営林署（現千頭森林事務所）を訪ねた。当時は国有林の生産力増強計画が始まってから10年で、千頭営林署の現場は本当に険しい奥地だった。営林署から出発して、途中から森林鉄道に乗って、急峻な山腹を縫って行った。その時に見た風景は、上も下も皆伐して植林したばかりの造林地で、下のダム湖まで丸見えだった。途中には熊を捕るワナも仕掛けてあった。2～3時間ほど上がったところが伐採の最前線への入り口で、そこから飯場・宿舎があるところまでさらに歩いて30分。伐採現場は、まだそこから1km以上先。最前線では4段集材で亜高山帯原生林での大面積皆伐をやっていた。奥地林開発・大面積皆伐という意味がよく分かった体験だった。その時は「すごいことやっているな～」と感じ、驚きの現場であった。

里山型の現場である高萩営林署（現茨城森林管理署管内）にも行った。普通の緩やかな人工林だった。大子町の宿舎は、目の前には久慈川も流れていて、そこもアユ釣りができ

るので、私は竿を持って行った。現地調査や資料収集を行い、終わった翌日にアユ釣りをしようとしたら、夜に38度超の熱が出たが、根性で治して、翌日は釣りを楽しんだ。川のことによ山のことによ、この当時はまだ環境問題は顕在化しておらず、気づいてもいなかった。

そして、次には大台ヶ原につながっている大杉谷（三重県側）に行った。出発点が尾鷲。そこから山を越えて大杉谷に入って、奥地林伐採最前線まで行けた。その時に原生林を切り開いて林道建設をしている現場を見た。切り裂かれた林道の断面に、まるで仁王様のようなブナの巨木群を目の当たりにした。威厳に満ちた原生林を伐ろうとする現場を見て、「これほどのものを伐っていいのか?！」と畏怖の念すら感じた。一度気がつくと、いろいろなことが見えてきたし、開発への疑問が大きく膨らんできた。

その次は大塔山。和歌山県本宮町から上がって行ったが、そこはめちゃめちゃに荒れていて、愛する川は砂利だらけになっていた。谷川も土砂で埋まって、水が流れない状態。当時は、林道を作る際に土砂を全部谷川に捨てていたので、林道を作れば作るほど川が砂利で埋められて水は伏流水になってなくなっていた。それで、「これはいかん!!」と思って、環境問題に入り込んでいった。きっかけは怒りだった。愛する山や川がズタズタに傷つけられていることへの怒りである。

林野庁の委託調査テーマは生産性とか、合理化とか、計画等であったが、自分は現場を見て環境問題を強く意識するようになった。委託調査とは別に、後に論文にしていった。「客観視して文章にして発信できたらいい」という姿勢で取り組んだ。それが現場型研究者の役割であり、問題を世に出すことが大事だからとの思いからだ。

◇環境問題と保護運動をテーマとして：(30歳代、40歳代)

大塔山に調査に行った前の年に大雨があった。そのため、大塔川の下流では、河床があがって、その周囲の家が浸水して補償訴訟問題になっていた。それで、当時の大阪宮林局管内での問題の発生状況を調べると、結構いろいろところでそういう事例があがっていて、200件を超えていた。その多さに驚いて、私は自然保護や環境問題に対する住民運動や自然保護運動がどういうものなのかというところをテーマに進めていった。

また、当時は第一次リゾート開発期で、もともと有名な観光地の外延部がリゾートとして開発された時期である。林野庁としても無視できなくなり、林地開発許可制度（1974年制度開始）の検討のための調査が研究所に委託され、私は伊豆半島と富士山麓の林地開発に伴う問題の調査を行った。何が問題になっていたかということ、ゴルフ場等の開発地では伐採後にブルドーザーで地ならしをしてそのまま放置されていたという点。当時は、整地後に後始末をしなかったのが、ちょっとの雨でもあちこちで災害が起きてしまっていた。調査に行った先々でその惨い実態を見た。

1970年頃には、毎週のようにアユ釣りに行っていた酒匂川下流の河床が、大雨の後に2mほど土砂で埋まった。原因の一つは、富士山に近い小山町の山林開発だった。水源森林の上部は国有林で伐採による土砂流出が酷く、中腹から下はゴルフ場や別荘地のリゾート開発だらけ（20カ所余）だった。最初に行った大井川源流部でも、同時期にたくさんの崩壊地が発生した。木曾谷にも行ったが、南木曾国有林も、その裏側の沢筋の山も酷いものだった。花崗岩深層風化地帯での伐採地では、崩壊比率が30%以上という惨状だった。

国有林地帯での国策としての奥地林開発は、剣山と紀伊半島で盛んだった。四国では「剣山開発」。大きいのはスーパー林道建設だが、その前の木材増産計画時代に、谷沿い林道を多くつけて、ブナ林をバンバン伐採し、神崎製紙が下流に進出して、その受け皿と

なった。「国独資」による開発そのものであった。その結果、やっぱり1980年頃の大雨で山が数百haも崩れ、川も酷い状態になった。それを契機に開発は終息した。自然にあまりにも大きな負荷を掛けることをやると、自然のしっぺ返しは必ずくる。開発の負の側面は、大雨の多い日本では確実に現れる。

森林開発の問題では、国有林も伐採開発の論理として、老齡過熟林分を成長旺盛な若い木に変えて、見込み成長量を伐採するという「予定調和」が自然破壊・環境問題の両面から壊れた。それが1970年代だった。この時期に、私は、民有林も含めて「乱開発」から起きてくる環境問題と自然保護問題について研究を進めていった。それらをまとめたのが『森林「開発」の経済分析』であり、『日本の森林・緑資源』であった。

◇山村問題、そして海外の環境問題への接近：(50歳代)

1990年代になると日本の森林開発問題は一段落する。最後に触れたのは、御岳のリゾート開発の事例だった。御岳の巨大リゾート開発は、バブルが弾ける直前まで計画が進んでいて、この開発を進めた岐阜県、そしてJR東海や第三セクター自体が潰れただろうというほどの無謀な計画だった。途中でJRが下りたことで実現しなかったことは、本当によかったと思う。当時、御岳の長野県側開田村だけが小規模なスキー場建設を進めたが、開田村の宿泊施設は外部資本のホテル建設ではなく、農家民宿とペンションで地域の主体性を保ったことでうまく内発型の地域振興につなげていった。バブル時代の初期に外部資本に利益を吸い上げられた経験から得た教訓のもとに、開田村は自分たちの地域が持つ自然や土地、営みが大事な資源だという認識を持っていた。この経験から山村の有り様にも興味を持ち、後に、岐阜県の山村や高知県等の山村調査も含め都市・山村交流と内発型地域づくりに視点を置いた『グリーンツーリズムの可能性』を栗栖祐子さんとの共著で出版した。また、グローバリゼーションの中、危機が進む山村に関して高知県での問題にも取り組み、『「国際化」時代の山村・農林業問題：再建への模索・高知県からの報告』を鈴木文熹、川田勲、飯國芳明さんとともに出版した。特に旧物部村では、他地域に先んじて奥地集落の崩壊過程を目の当たりにした。

国際的な面も含んだ森林問題を取り扱った『森と環境の世紀—住民参加型システムを考える—』は20世紀の森林環境問題の総括として書いた本であり、グローバルな熱帯林伐採と跡地利用等にも触れている。これは、高知大学で指導留学生とのつながりを持つようになったことが大きい。例えば、留学生のノエルさん。彼が調整してくれて、フィリピン等で住民参加型のプロジェクト活動の会議の見学や、その取り組みで作られた社会林業地の見学に行った。私は1998年～2005年に私費で8回ほど海外へ行った。フィリピンのほかに中国北京水源林等も調査してきた。そのあたりは矢作川、四万十川流域とともに『流域の環境保護—森・川・海と人びと』に記述している。

現地では熱帯林破壊の跡地をどうするのかを見てきたが、跡地は社会林業プロジェクトや環境植林、マングローブ植林等だった。植林プロジェクトの見学では、日本のODA技術協力第一号であるパンタバンガン水源林造成地を訪ねた。現地調査とともにJICAから10年間の出来事をまとめている貴重な資料ももらった。メディアでは成功事例とまではやされていたが、現実はそうでもなかった。住民を追い出して植林したパンタバンガン水源林造成が経てきた様々な問題が、生々しく記録されていた。住民排除型であったために、給料の遅配とか何か事があれば植林木を焼き払っていた。無償供与したプロジェクトの拠点の研修施設も、新人民軍(NPA)に襲撃されていたという記録もあった。襲撃したゲリラ側の主張も筋が通っていたし、強権収賄体質のマルコス政権への反発と、戦時支配されていた日本への悪感情も「声明文」に記されていた。殺傷事件こそなかったけれ

ど、いろいろな問題が記録されていた。フィリピンは、この経験が契機となって、以後の環境植林や社会林業の取り組みでは、住民参加型に転換している。

他に、ボルネオにも行って来た。コタキナバルから奥地の原生林伐採現場を見た後、中間地帯に立地する合板工場で、アカシアマンギウムのハイブリット種の挿し木造林をしているところを見てきた。そこでは数千 ha の植林をしていたが、今はもうない。付近からの延焼で燃えてしまったようだ。背景には、焼畑をやっていた地元住民の燃やすことへの抵抗感のなさがあった。電柱工事で邪魔な木は燃やしていたし、まだ焼畑も行われていて、火をつけること、山を燃やすことには抵抗がない。現場に行ったからこそ分かったことだが、そういう風習に対応していなかったのが、植林地に延焼した原因だろう。やはり国際的活動においては、文化の違いは大きい。これらについては、『破壊から再生へ—アジアの森から』で書いている。

◇シカ問題への取り組み：(60 歳代)

「環境保護と森林」(依光良三・小林那々緒著『入門 環境保護と森林』所収)には初めてシカの話が出る。シカの問題には 2003 年くらいから取り組んでいる。当時、高知県の環境審議会でそういう問題が出てきた。黒尊でやられているという話だったので、西土佐村の役場の人の案内で現状を見た。

モミの木はかじられていたし、中には倒れていたものもあった。ササも一部枯死していた。シカによる被害を実際に見たのは初めてだった。「これは森にとって危険だ」と感じた。そこで、本格的に調べようと、2005 年に知床、大台ヶ原、屋久島に行った。そもそもシカはどんな行動をするのか、どんな行動がどういう被害を起こしているのか、そういう「現場」を見たくなった。3カ所とも間近でたくさんシカを見ることができ、特に知床ではすっぴんの(無警戒な)行動が見られた。シカは夕方によく出てくるので、よく観察できた。知床では 100 頭ぐらい見られたので、しっかり写真が撮れた。シカが何を食べているのかについても分かった。春先は樹皮剥ぎが凄いいし、ササも真っ茶色になっていて凄かった。食べ方も 5~6 枚くわえて一気にもぐもぐとすごい勢いで食べる。しかし、夏に行くとササは緑がいっぱいで、樹皮も生々しいものはなかった。その時は牧草や草を食べていた。つまり、本来食べる物を食べていた。このことから、ササや樹皮が冬の非常食なのだと分かった。グリーンシーズンにはササはあまり食べない。そういうことを 2005 年、2010 年、2015 年の訪問で見えてきた。2011 年からシカの捕獲が始まったので、2015 年には激減していたし、その頃はもう無警戒なシカではなくなっていたけれど、2005 年と 2010 年とで本来のシカの行動を理解できた。

大台ヶ原ではササしかないの、シカはササばかり食べていた。なので、ササが 5cm ほどに矮化してゴルフ場のグリーンようになっていた。ここではササの生き残り戦略を見ることができた。大きく開けたところだと、ササは全滅することはないということも分かった。太陽光を十分に浴びられることが大きい。反面、ササの存続が危ういのは、小規模な群生地や樹林内のササ原で、高知県の三嶺のようなところが最も危険だった。

しかし、2003 年頃は、足元(三嶺)では、まだ変化は見られなかった。初めて被害を確認したのは 2007 年だった。奥物部のさおりが原に行ったが、その時にはすでに半分くらいやられていた。登山者らへの聞き取りでは、その場所は 2005 年には何もやられておらず、2006 年に徐々にやられていたようだった。2007 年に稜線部のカヤハゲのササ原が完全に枯死していた。そして、2007 年に有志が集まってボランティアネットワーク「三嶺の森をまもるみんなの会」(以下、みんなの会)を設立し、その後はシカ害の啓発活動や防護や再生活動等、多様な取り組みを精力的に行うようになる。

◇住民参加の実践側に入って：(60歳代後半、70歳代)

こうして私は、住民参加を客観的に見てきた研究者の立場から、実践者の側に入って活動するようになった。この取り組みは、『シカと日本の森林』等につながっている。

かつての森林を巡る問題は、奥地林開発やリゾート開発等の乱開発だったが、それは市民運動による対峙型運動により解決が図られてきた。今日のシカ問題は、みんなを巻き込む形の連携協働型活動での解決しかない。そのために、「みんなの会」は現場再生活動とともに情報発信型で取り組んでいる。現場活動、写真パネル展、シンポジウム等の活動も、メディアが取り上げてくれるので、行政も対応せざるをえなくなっている。それに加えて、「学」のほうでは、高知大学の理学部生物学の先生やOBの先生方等が入ってくれている。行政との協働、「民」の主導的取り組み、「学」の参加の形ができてきた。ただし、行政は役職員がすぐ異動するので継続性がないのが問題。民間団体なら入れ替わりがないので、「民」を中心に活動することになる。直面する課題をまとめ、発信していく。やはり「民」の力が強いことが大事である。

去年、私は30回くらい山に行った。そうするといろいろな発見がある。その発見の中から、次の策が出てくる。やはり現場に学ぶことが大事。最近ではグーグルアースを覗くと、最新の山の画像も出てくる。これで三嶺を上から見ると、稜線とすぐ下が凄く荒れていることが分かる。いつもは山に立って、自分の目線で確認をしているけれど、全体として見られるのはよい。周辺も覗いてみると、三嶺に限らず、四国山地も紀伊半島もすごく山が荒れている。ササはマット状に土砂を抑える力があつたが、それがなくなること土砂がずるずる落ちている。こういう状況は、シカの分布域の拡大とともに、日本の山岳稜線部から中腹自然林地帯で全国的に進みつつある。シカがいなかった石鎚山の状態は、2003年頃の三嶺の状態と同じだが、確実にシカが進出してきている。今なら石鎚を護れるかもしれない。そういうところへの警鐘のために、今、冊子『シカ食害で痛む 三嶺の森—再生への途と課題—』にまとめているところだ(2017年5月発行)。

◇もう一つの恋人：(これから)

そして、もう一つの私の恋人である川の問題もやらないといけない。昨年、久しぶりにふるさとの安芸川上流を訪ねたが、砂利だらけになっていて、「安芸川は死んだ……」と思った。原因は、安芸川上流の林業地帯での120m/haの高密路網の開設とその奥地での大面積の皆伐が進んでいるため。その現状は、環境審議会で発言した。しかし、今、林業振興の中で集約化と路網開設が推進されており、高知県で進む「森の工場」(集約林地)は規模が大きく、作業道が密になり過ぎていて林道・作業道が崩れやすく、土砂流出源になっている。森と川の関係においては、大雨地帯では、かつての奥地林伐採開発時代の再現になりつつある。

いま、シカによる源流域の荒廃と安上がり作業道の建設等によって、ほとんどの川が荒廃している。川は森の状態を映す鏡。時間ができたら、森と川の在り様を環境視点から見ていきたい。これまでも、『土佐の川』や『土佐のアユ』を西島先生、谷口先生らと書いている。今は川の豊かさも昔の1/10以下。川は巨石護岸設置工事等により表面的には人工的な奇麗さを見せているが、川の生き物たちにとっては最悪な状態である。豊かな川でとことん遊んで、本当の川の原点を知っている自分がやるしかない。原点を知らない一般の人は「川が壊れている」という意味が分かっていない。その認識の違い、出発点の違いは大きい。

2. 研究における基本的なスタンス

◇研究スタイル

私が大事にしてきたのは、原風景・原体験を物差しにして、現場を自分の目でじっくり見ること。そして、自分が感じたことを文章に記して、社会に発信して警鐘を鳴らすこと。文章を紡ぎながら感じてきたのは、「自然の価値」。失われた自然の価値はどのくらいなのか……。今の三嶺を元に戻すにはいくらかかるのか……。昔の三嶺は、盤石の森だった。本当に豊かな森だった。あの森を元に戻すには途方もないお金がかかる。それこそが「三嶺の森の価値」。昔からそこにあるものの価値をしっかりと捉えなければ、護れない。だから私は警鐘を鳴らし続ける。私はもう研究者じゃないけれど、運動者というほどではない。新しい形の自然保護活動者なのかなと思う。

◇影響を受けた人

影響を受けたのは、林政総研時代には、木材市場・流通・住宅産業の研究もやっていた、安藤嘉友、村畠由直さんには、現地調査や合宿、執筆等で度々助言していただき、構造分析面で影響を受けた。研究所の奥地正さんは、歴史を見る目が凄かった。1970年ぐらいに奥地さんと話をしている、「日本林業や山村はどうなると思うかね？」と聞かれて答えられないでいると、彼は「20世紀で大体終わるよ。滅びるよ」と言っていた。現実はそのとおりになった。歴史を見る視点、「国独資」体制とグローバリゼーションの中の展開、将来を見るという視点には影響を受けた。また、1984年に、京都大学の半田良一先生に学位論文の指導をいただいたが、やはり歴史と構造面での分析の重要性の影響を受けた。近代経済学出身の私は、マルクス経済学の先生方に影響を受け、「近マル経」的な分析が多くなっていく。ほかに、都留重人著『公害の政治経済学』、宮本憲一著『環境経済学』等も勉強になった。

3. 林業経済研究に携わる者へのメッセージ

◇中堅・若手研究者へのメッセージ

僕らの時代はいい時代だった。森林・林業・山村・木材市場・流通、そして環境問題等、その時々課題をなんでもやれたし、細かいことにとらわれずに済んだ。大学に赴任するまでは業績が何本あるとか、意識もしなかった。昇格の絶対条件だと知ったのは、高知大学に来て以降だった。今の研究者は、最初から業績にとらわれざるをえない状況に置かれていて、大局的な大きな流れ・テーマの中で研究をやっていくのは難しいかもしれない。さらに、個人情報保護法にも縛られて、村・集落・森林組合員等の一斉アンケート調査もすごく難しくなった。

今はそういう意味では研究環境が厳しい。自分の足で、目で、耳で、情報をとるしかない。中には、調査費がないので現場に行けないという方もいるかもしれないが、私は調査費がなくても、旅費は自分で出して行っていた。結局はモチベーション次第だろう。好奇心を強く持てば現場に行きたくなる。若い人たちにも、ぜひ現場を頻繁に見てほしい。現場で起きていることを見て、感じて、動いてほしい。私は、いまだに自分の興味・好奇心で動いている。生涯現役と言いたいけれど、残された時間はわずかになった。

研究に入った時は統計分析からだだったが、そういう手法には限界がある。山村・林業問題も、その在り様は奇麗事ではどうしようもないところまできている。現場に行くと、実

際に見て、自分自身で考えてほしい。本当に、現場は変わる。行くたびに変わる。シカ問題の現場の様相は3～4年ごとに変わっていく。環境問題も、昔は10～20年単位でよかった。元凶の開発事業、問題の発生、反対運動、対応策。しかし、今の変化は早い。山村問題も年々変わる。すぐそこに無住問題も見えてきた。自分で見に行くと、違うものが見える。若い人には現場にどんどん行ってもらいたい。

元々、勉強嫌いの自分は、論理展開力にも劣るので、学者型の生き様は捨て、実践的調査研究者としての道を歩んできた。それでも、長くやっていると、帰納的に普遍化できるものも出てきたりする。実態から構造や仕組みを読み解ける場合もある。若手の中にも論理構成力に優れた学者タイプもおられると思うし、私のような現場調査者タイプもいると思う。それぞれの価値観で社会科学として、環境問題等、負の側面も視野に入れつつ社会の役に立つ研究を進めていただきたい。

参考文献

- 依光良三 (1967) 素材生産事業における機械化の影響—東京営林局を対象として—。林業経済, 20(9) : 1-11.
- 依光良三 (1975) 森林「開発」の経済分析。日本林業調査会, 123 頁。
- 依光良三 (1984) 日本の森林・緑資源。東洋経済新報社, 208 頁。
- 依光良三・西島敏隆・谷口順彦・松浦秀俊 (1989) 土佐のアユ。高知県内水面漁連, 240 頁。
- 依光良三編 (1992) 土佐の川。高知県内水面漁連, 216 頁。
- 鈴木文熹・依光良三・川田勲・飯國芳明 (1995) 「国際化」時代の山村・農林業問題：再建への模索—高知県からの報告。高知市文化振興事業団, 287 頁。
- 依光良三・栗栖祐子 (1996) グリーンツーリズムの可能性。日本経済評論社, 212 頁。
- 依光良三 (1999) 森と環境の世紀—住民参加型システムを考える—。日本経済評論社, 292 頁。
- 依光良三編著 (2001) 流域の環境保護—森・川・海と人びと。日本経済評論社, 245 頁。
- 依光良三編著 (2003) 破壊から再生へ—アジアの森から。日本経済評論社, 287 頁。
- 依光良三・小林那々緒 (2006) 入門 環境保護と森林。富士書房, 167 頁。
- 依光良三編 (2011) シカと日本の森林。築地書館, 244 頁。
- 三嶺の森をまもるみんなの会 (2017) シカ食害で痛む 三嶺の森—再生への途と課題—。105 頁。

(文責：松本美香)